

FMラジオ 箕面 道ばたサミット

天皇陵はなぜ造られたか

二〇〇〇年十二月二十日

古田武彦

中高年のための古代史

(こんにちは。今日の箕面道ばたサミットは、森戸博子の担当でお送りします。どうぞ、ご一緒ににつき合ってください。)



(きょうスタジオにお出でいただきましたのは、歴史学者の古田武彦さんです。きょうは実は第二回目です。古代史について「天皇陵はなぜ造られたか」について、お話しいただきます。音楽担当は小林良則さんです。二人とも、よろしく願います。)

(古田先生、遠いところ有り難うございました。)

はいどうも、こんにちは。今日は第二回目のお話をしたいと思つてまいりました。

ところで大阪から列車で山陽本線でまいりますと。この山陽本線ですね。ところがあの山陽本線は、ほとんど海岸部を通っていないということに、お気づきでしょうか。もし、あれ海岸部を通っておれば、あの美しい瀬戸内海を左手ででしょうか、ある時は右手でしようが見て行けるのですが。ですが、ほとんど海が見えないことをお気づきでしょうか。

実はこれは、なぜかと言いますと、日清戦争、当時は中国を「清い国」と書いて清国しんごくと言いましたが。その清国の「定遠ていえん(定まる)と遠い)」という軍艦、もう一つ「鎮遠ちんえん(鎮めると遠い)」という軍艦があつたのですが、当時は定遠・鎮遠というと最高級の軍艦だつたようですが。それが瀬戸内海に入つて来て攻撃されたときに、(線路や列車が)艦砲射撃でずたずたになる。だからそれを遠避ける形で、海岸部をさけて走らせた。こういう話を聞きまして、わたしもびっくりしました。

(まあ、そうですか。)

実は昨日も、大阪の交通博物館に電話して確認しましたが、大体そのようだ。東海道本線もそのようです。記録にいろいろと残っています。ということ、どうもまちがいないようです。

おそらく皆さんは、今日の話を聞くまでは思いも寄らなかつた人が大部分。わたしも昨日まではそうでした。

なんで、のつけから、こんな話を持ち出したかと言いますと、じつは天皇陵と言いますが、奈良県から大阪府にかけてあります。皆さんもよくご存知だとおもいますが。これが実は、本当の目的、お墓ともう一つの目的、実はこれは(古代の)軍事要塞であつた。つまり砦とりでとして作られていたという、わたしの仮説ですが、お話ししたいと思つてやってみましたわけです。

(まあ! ほんとうに、そうですか。)

皆さんは、なぜ？。そんな馬鹿なことがあるか。初めて聞いた方は、とうぜん、そう思われるとおもいます。ところが現の証拠は、大阪府の高槻市。そこに今城塚古墳という古墳がございます。これは天皇陵、ほんとうは継体の墓だという説があるぐらいですが、墳丘のはばの長さが一九〇メートル、全体の長さが三五〇メートルという巨大古墳ですが。これを教育委員会が調査したところ、近世、織田信長の時代だと言われる砦のあとが、頂上はもちろん、二重の周濠しゅうこう、その埋められた内側の濠ぼりに土塁どるいを高く、築いたあとが出てきております。これは近世、織田信長の時代には、鉄砲が出てきておりますから、鉄砲をふせぐためには、土塁を高く築かなければ防げない。補強作業をしたものとおもわれます。ほかに近世に天皇陵が砦とりでとして使われたという痕跡こんせきは、考古学者の方に聞かれれば、めずらしい話ではない。

これにたいして、わたしらはそんなお墓として祭られたものを、砦とりで（とりで）として使うのはけしからん。そういう感覚で今まで居りました。果たしてそうだろうか。つまり近世の戦争のプロと言っている織田信長などにとっては、屈強の砦と見えていたわけです。と言うことは、同じく弥生時代や古墳時代にも、そのように見えたのではないか、ということです。

（まあ同じ人間ですから、そういうことがあるかも知れませんが、はい！）

それでは造られた当初から軍事的な要塞。もちろん、これはいつも軍事的な要塞であったというわけではありません。「一旦緩急（いったんかんきゅう）有れば」という古めかしい表現、敵が攻めてきて軍事的緊張が高まった場合。その時には、砦とりで（とりで）として機能する。それがあの巨大古墳を造るばあいの大きな目標になっていたのではないか。そう考えてきたわけでございます。

だから造つたのは崇神天皇。第一〇代目の天皇である崇神天皇のときに造られた。そう言うことが判っていますし、『日本書紀』にそう書いてある。そうしますと崇神天皇とは、どんな天皇、どんな時代だったか。『古事記』によりますと、崇神天皇は、大和盆地から出て、三方に支配を進めた天皇である。三方といいますが、東海道、もう一つは北陸。もう一つは京都府の丹後・但馬、そっちの方。その三方に軍を進めて征服したと書いてあります。『日本書紀』ではもう一つ加えまして、西の吉備の方にむかって。先ほどの山陽道に向かつて征服して行ったように『日本書紀』では書いてあります。

（じゃ、『古事記』と『日本書紀』では違っているのですか）
違うのです。『古事記』は三道（将軍）、『日本書紀』は四道（将軍）です。

これをわたしは、『古事記』が本来である。それを『日本書紀』は、さらに一つプラスして、崇神天皇を立派にえがいた。逆はあり得ないですね。『古事記』も『日本書紀』も天皇家の中で作られていますから。ほんらいは四道であるものを『古事記』が、これはよけいだとひとつ除いて三道にするということも、ちよつとありえない。時間的にも『日本書紀』より『古事記』が先にできていますから。ですから『古事記』の三道がほんらいである。わたしはそう考えています。

（じゃ、『日本書紀』は、話を大きくしたわけですか！ そうですか。）

そう、その通りです。それで、そのように考えてみますと、崇神天皇のとき、大和盆地がいかに新しく、かなり広大に支配下に、入ったということは明らかなのです。そうしますと、今のような巨大な古墳を造るのには、たくさんの人、労働人口がいるわけです。（そうですね。むかしは全部手作業ですよ。）

（そうですね。あの！ 最初からショックな話ですね。）

一番最初からの巨大古墳をご存じでしょうか。これは実は食べるときの箸はしと書いて、箸墓はしかとよばれる墓が奈良県にございます。奈良県にゆうめいな三輪山という山がございますが、その山のふもとと言っている場所でございます。この箸墓は長さが二五六メートル、大きいですよ。わたしは方円墳、一般には前方後円墳と言われますが。これがいきなり造られます。その前は二〇〇メートル、その前は一五〇メートルという、段階を踏んでいったのではない。いきなりパツと、でかい古墳が出現したと、考古学者は言っています。（そうなんです。いきなり大きくなったのですか。だんだんと大きくなったと思っていたのですが、そうではないのですか。）

これについては、岡山大学教授の（近藤義郎という）方の有名な論文がありまして、それで、そのことは明確に分かっているのですが。それでは、じゃあ、なぜ、急に、いきなり、そんなにかい物を造らなければならなかったのか。その説明がじゅうぶんに着いていなかったわけですね。

わたしが、それに対して考えましたのは、この墓に祭られているのは、「倭迹々日百襲姫命（やまとととびもそひめ）」と言ひまして、言いにくいですが、「と」を三回言わなければならない。

（「と」を三回も言うのですか。）

この読みは、またわたしには異論がありまして、今は申しませんが、ふつうに言われているのは倭迹々日百襲姫命が祭られていると『日本書紀』に書かれています。しかし考えてみると、この巨大な古墳を造つたのは倭迹々日百襲姫命ではないですよ。

（そのとおりですね。舌を噛みそうな倭迹々日百襲姫命が造りませぬ。）

昔はじゅうらい大和盆地のなかの人だけで造っていた段階では、初代神武から九代開化までは、そんなにでかい古墳はない。ところがパツと、一〇代崇神の段階で、いきなりでかい古墳ができたというの、それに労働人口というか、集める労働人口が格段にふえた。そういう巨大な労働人口をバックにして、あのような巨大な古墳が造りえた。こう考えるのが話としては、わたしは、ひじょうに分かりやすい話である。

（じゃあ、すごく盛大な勢力をもっていたということですね。）

そうですね。大和盆地内がひとつ、こんどは大和盆地外が第二。その二つの領域をあわせて、その労働人口をつかって築いた。こう考えるわけですね。それはよいのですが、それじゃあ、何のためにそんな巨大古墳を造らなければならなかったかということが、本日（この文脈では）の主題に関連しているわけです。それでじつは、征服された方は銅鐸圏である。征服した方は、九州伝来の三種の神器を宝とする天皇家である。ところが征服された方は、銅鐸をお祭りの道具とする銅鐸圏です。これは、じつは西は中国地方から東は東海地方まで広がっていた。その中に征服をうけた。それで征服をうけたほうも喜んで征服される人はいませんから。たいへんに脅威を感じ、反発を感じたことはとうぜんなのです。その脅威を感じ、反発を感じた人たちが、銅鐸圏の中心はどこか。それはじつは、大阪府の茨木市なのです。

（そうなんです！ 茨木が中心なのですか）

東奈良遺跡。奈良県の「奈良」に「東」を付けて東奈良遺跡とよびます。しかし大阪府のなかにあります。そこから質・量ともに最大の銅鐸の鑄型が、日本列島中ばつぐんに出てきたのが茨木市東奈良遺跡なのです。この地帯が銅鐸圏の中心だったのです。この中心地が、先ほど言いました『古事記』で西のほうが抜けていると

いわゆる応神陵・仁徳陵というのは、たいへん大きな古墳でございますまして、仁徳陵は長さが四八六メートル、世界最大と言ってもよい。

（世界最大ですか。）

と言いますのは、秦の始皇帝陵とは比べかたによります。秦の始皇帝陵は東西三四五メートル。ですから仁徳陵よりだいぶ小さいです。ただしかし始皇帝陵のほうはほぼ正方形に近いので、南北も三五〇メートルあり、体積は秦の始皇帝陵のほうが仁徳陵より大きい。しかし目で見たところは、仁徳陵のほうが一四〇メートル以上大きいのですから、仁徳陵のほうが大きいとも言える。見方によって秦の始皇帝陵と仁徳陵、どちらが大きいかという感じなのです。

同じく応神陵も、長さは仁徳陵よりやや短いですが、ところが体積のほうが仁徳陵より応神陵のほうが大きいのです。

（そうですか）

ですから応神陵・仁徳陵どちらが大きい。見方によつて、どちらとも言えるような。そういう世界的に巨大な墳墓であることは、間違いない。

（あの中国というすごく広い土地で、秦の始皇帝と言えば誰でも知っている名前ですが、そのお墓より、もっと大きなものが日本のような、ずっと小さな国にあるというのはすごいことですね。）

ですから天皇陵というのは、応神陵・履中陵などの大きな二つだけではなく、これに準ずるものがやたらにある。それじゃ、何であるのか。

よく言われるのは、四世紀の後半から五世紀前半という、応神から仁徳の時代にかけて、朝鮮半島で高句麗と倭軍の激戦の真つ最中であつた。それは高句麗好太王碑という、四一四年、五世紀のはじめにできた石碑にはつきり書いておりますので、疑いのない話です。

うのが、わたしの基本の考えかたです。

そうすると、一貴山銚子塚古墳というのが筑前二丈町にあります。さらにはゆうめいな装飾古墳、さらには有名な石人・石馬の古墳。これらはいずれも一〇〇メートル前後の中型古墳です。巨大古墳はない。ということは、いずれも朝鮮半島で高句麗と激突している倭軍。倭王の中心勢力にふさわしい規模である、ということが出来る。これに対して近畿の場合は、同じ三種の神器を奉じ、よしとする勢力である。親戚関係である。わたしはよく言うのですが、イギリスに対するアメリカ合衆国の関係である。イギリスが本家・本元で、アメリカ合衆国はそこから分派して本国よりも大きくなった。あのイギリスとアメリカ合衆国の関係によく似ている。そういう存在が近畿天皇家である。

そうしてくると近畿天皇家は応援勢力ではあつたでしょうが、主勢力ではなかつた。朝鮮半島では戦う上に。しかし、そうは言つても高句麗が九州に攻め込む。これを博多湾岸に攻め込んだことを、おそれて筑後に下がつたわけです。さらに関門海峡を越えて大坂湾に突入してくる可能性がある。そうすると応神陵というのは、大阪の方はよくご存じですが、羽曳野市あたりの古市古墳群といひまして大和川が大和盆地に入る入り口になっています。天皇家の一番最後の根拠地が大和盆地です。

（最後の根拠地が大和盆地ですか。回りは、山に囲まれていますし・・・）

大和盆地は、まわりが、まさに山にかこまれた天然の万里の長城のようなものです。山に囲まれているでしょう。そこに侵入しようと思えば、今の（大阪府）羽曳野市のところ、大和川のところを、通つて侵入してくるわけです。そこに応神陵を造つている。ついで堺市の百舌古墳群、海岸に上陸してきたときに仁徳陵を中心にする百舌

それに対して、従来のほとんどの学者、わたし以外のほとんどの学者は、それを見ても朝鮮半島で高句麗と戦つたのは近畿天皇家である。そのように思つたり、書かれたりしている本がひじょうに多いと思います。

（そうですね。そのように習いました。）

わたしはそれは逆だ。それは、むしろ近畿天皇家が主勢力でなかつた証拠である。なぜかと言いますといまの好太王碑のところに墓がありまして大王陵。人によりましては、近所に將軍塚というのがありまして、そちらのほうだという人がいますが、どちらにしましても一〇〇メートル前後、まあ日本いえば中型古墳、中程度のお墓なのです。ということは高句麗の人は、王様のお墓を造つて祭るのに熱心でなかつたから、そんな程度のもので終わったのか。そんなことは、ないとおもう。なぜとならば好太王碑に書いてありますように、いまや倭軍と激戦の真つ最中です。あの好太王碑を建てたから、あとは激戦は終わったのか。そんな話ではない。そうすると交戦中でありながら、そんな古墳を造る余力はない。戦うのも古墳を造るのも同じ人間ですから。

そうしますと、やはり交戦中の高句麗としては、まさに一〇〇メートル前後というのが適正規模ということが、言えるとおもう。いや、そんなことはない。日本人には超能力があるのだから、かたほうで高句麗と戦つて、かたほうでは、あのような世界最高レベルの天皇陵を次々と古墳を造る力量があつたのだ。そういうことをいう人がいたら、わたしは信用しませんね。

（それはちよつと信用しませんね。それはふしぎな話ですね。）

わたしは日本人が、劣つたつまらん人間だとは思いませんが。どうじにまた超能力をもつたすごい人間だとも思いません。まあ朝鮮半島・韓国の人々とも似たか寄つたかの人々・人間であるとい

古墳群が控えている。そして、いまの古市のほうへ行こうとすればバックからこれを攻撃する。この二つの砦でむかえ撃つ。いずれも屈強の軍事的砦という性格をもつて造られたのでないか。

（じゃ昔は砦としての状態だつた。今ほど人間が多くないのに、あれだけ大きな砦があつたのなら！ ものすごくあつたですね。）

ものすごく敵の侵入をおそれてというか、恐怖というか、これに対応する。

ちよつど先ほど言いました（明治時代）山陽本線を作るときも、東海道本線を作るときも、敵がどう攻めてくるかをいつも気にしている。それに対する軍事的補給路を兼ねてつくつたわけです。同じように古墳を作るとき、ただ平和にお祭りしませんでした。一方はお祭りですが、他方はなにかあつたばあいの軍事的よりどころ、というかたちで造られた。

今の大和盆地は、大和盆地全体が大自然がつくつた天然の万里の長城のような屈強の場所なのですが、その中でも飛鳥という場所は、有名な大和三山という山がある。畝傍・耳成・香具山とごいいます。あの山はまた天然の、見張り兵がいたり指揮集団が居たりするのには屈強の場所だつた。あそこに囲まれているから、飛鳥というところは、わたしの表現では「万里の長城の中の千里の長城」のような、二重装置の軍事的にひじょうに守りやすい場所。

現代のわたしたちは、そんなことを思いがら行く人はいませんが。それは平和な時代になつたからであつて、いわゆる軍事集団として発生した、熊野を通つて入つてきたというのですが。そういう天皇家の勢力にとつては、飛鳥は屈強の根拠地だつた。それをとりかこむ大和盆地。さらに、そこに瀬戸内海が入つて上陸してきたときの砦。そういうものが応神陵であり、仁徳陵。それをとりまく古墳群であつた。

（それでは、今よりも昔の方が、戦争とか侵略とか、島国であるがために、ひじょうにそのようなことに備えていて、智慧を出しあつていろいろなことを考えて創つたということですか）

とくに敗戦後の日本は平和な時代に入ったために、そういう目で見ると忘れちゃつたところがありまして。（たとえば）東京に、はじめて車で行つた方は、本当にびっくりされるのですが。あそこはホントに道がまがりくねって、分かりにくい。皇居のほうに行くつもりなのが、違うところに行つてしまった。変な風に道がずれている。これは道路の作り方が間違つていのではないで、江戸時代に江戸城に敵が攻めてきたときに、まっすぐに入られないように、道をワザと変なところにグルグルまげてしまった。それを現在も受け継いでいるから、東京というのは京都と違ひまして、ひじょうに変に曲がりくねっている。そういう軍事道路をいま使つて、平和に車で走つておられる。

現代の目で見ると、ほんとうに歴史としての古代の姿が見失なわれてしまうという問題であらうと思います。

なお付け加えますと、天皇陵たとえば履中陵などが百舌古墳群にあります。この陪塚から、ものすごい数の武器が、鎧・兜や剣がおびただしく出土しました。そしてまた大和盆地の中でも、メスリ山古墳などからは方部の下から、何百人分の鉄器・武器が出土しました。

（何百人分ですか。すごい量ですね。古代にしてみたら。）

（そういう）有名な話があるわけですよ。かなり天皇陵や古墳の中や周辺から武器が出土することがひじょうに多い。まあ一番、はつきりしていることは、あの中に葬られた御当人は、たいてい剣をもつていませんか。勾玉や鏡は、あつたりなかつたりしますが、

実はそうではない。

なぜかといえば『三国志魏志倭人伝』の中に、魏の明帝の詔勅が、長い文章が載っています。一〇〇枚の鏡、これを与えると書いたあとで、これを国の人たちに見せて、わたしが、つまり中国の天子が、倭国の女王卑弥呼をひじょうに愛しいつくしんでいる。そういうことを知らせなさい。これは『魏志倭人伝』を読んでいる人は、みんなよく知っている文章だ。ところがよく考えてみますと、美術品として、よい美術品だから見て楽しみなさい。博物館でも入れなさい。そういう意味ではないと。

そうすると今言った言葉を考えてみますと、もし卑弥呼を攻撃する人間がでてきたら、卑弥呼をいつくしみ愛しているわたくし、魏の、中国の天子を攻撃するものと心得よ。そういう意味を、あの魏の詔勅はもつていとおもう。もし、その覚悟がなければ、うつかり倭国の女王を攻めることできない。

（じゃ、あれは外交上の・・・。それが外交上あつたことによつて、起きなくてもよい争いが起こる・・・そういうことがあるんですね。）
そう、外交上の全安保障です。卑弥呼が、骨董好きの女性だったという見方は間違つている。卑弥呼が、お化粧好きで、鏡を集めてお化粧していた。そういう考えていたのでは、ぜんぜんダメです。

そういう意味で、さらに考えますと。博多湾岸を中心に前漢式鏡、後漢式鏡は、前回言いましたように糸島博多湾岸を中心にできてきます。それらは軍事的意味をもつている。それを持つている王者を攻撃することは、中国を攻撃するという意味を持つ。そういう軍事的意味をもつた。

こんどは、それに対して三角縁神獸鏡というものは中国にはない。そつくり同じものはない。だから今度は、今のに準ずること

女性は別にして、剣をもつていない人は、ほとんどいない。死んでも武装しているという姿をしめています。

（そうですね。安楽にというかたちではないですね。）

それを中心にしているのですから、その古墳がまったく軍事を無視した古墳であるはずがない。そのように言えはいえる。

（それでは、古代にはわたしたちが思っているよりも、もつと、わたしたちが感じる戦争というものは、頻繁（ひんばん）に戦争というものが、あつたのでしょうか。）

それは、いつも恐怖に。縄文時代やそれ以前には、動物との戦いにあけたでしょうが。一番その恐怖は寝ていても、いつも頭にあつたでしょうが。人間がけつきよく動物とのたたかいに勝つて、弓や矢武器の力により人間が勝つたあとは、今度は人間同士の戦いが、いつも頭に離れなつたと思います。

それで、さいごに興味深い問題を付け加えさせていただきます、いいですか。

三角縁神獸鏡、銅の鏡ですがいつも古代史で問題になります。ところが、あれについて、なぜか従来の学者・研究者や教育の場でも、ほとんど問題にされていない重大なテーマがある。わたしの考え方が間違つていなければそう思っています。

（それは、どんなことでしょうか。）

銅鏡の軍事的意義、こういう問題です。

（鏡でしょ。銅鏡というのは。）

それが重大な意味を、持っています。みなさん誰もが、天皇陵が軍事基地だと言うだけでも、だいぶまゆつばだと思つて聞いておられたのに。あの鏡が軍事的意味があるとは、とんでもないことを言うやつだ。そう思いながら聞いておられるかもしれませんが、

で。わたしは三角縁神獸鏡というものは日本側で作つたと考えていますが。その場合は、やはり前漢式鏡、後漢式鏡のそつくりさんを作つたら、中国側の了解が了承があると思う。了承なしに作つた場合は、鏡としては似ていても違う鏡。三角縁の縁が付いたり、なかのデザインが違います。似ていても違う鏡を作らせていただきました。そういう意味が三角縁神獸鏡です。ただし、鏡の性質は共通していますので、この鏡の原産地は中国です。われわれは中国に協力する体制にいる。そういう証拠品が三角縁神獸鏡だと思う。ですから三角縁神獸鏡を持つているものを攻撃する場合は、やはり後ろにいる中国といつ戦つても、やもう得ない、そういう覚悟がなければ攻撃できなかったはずだ。そういう中国の鏡に準ずる価値を、三角縁神獸鏡も、もつていた。『魏志倭人伝』を読めばとうぜんのことなのですが、なぜかそういうことを触れたものを、あまり見たことがないので、今日の「天皇陵の軍事的意味」に、「銅鏡の軍事的意味」という問題をプラスさせていただきます。

（むかし安全保障があつたというところで、ちょうど時間がきてしまつたのですが、先生はご著書がたくさんありますが、その中で『失われた九州王朝』。これは朝日文庫から出版されています。これを先生は推薦されていますので、ご興味がある方はもつと深く知りたいたいというかたは、お読みになつてください。

今日は、歴史学者の古田武彦さんに「天皇陵はなぜ造られたか」をお話しいただきました。番組をお聞きになった方は、えつと思われたところが、いっぱいあったと思われれますが、楽しい話しを聞かせていただきました。今日のお話は中年・熟年層を対象ですが、次回は年輩の方を対象に「歴史のなかの祝詞」を企画しております。先生は精神的にたいへん若いお方ですが、たいへん遠いところお出でいただいて、また来ていただいけるでしょうか。よろしくお願いたします。

終わり

■ 著者古田武彦・発行人横田幸男から

これはFMラジオ・箕面道ばたサミット、二〇〇〇年十二月二十日放送の「天皇陵はなぜ造られたか」のテキストです。放送と文字は、それぞれの上一一致しておりません。したがって史料批判はできません。

史料批判を試みられる方は、公開している古田史学会報や『古代は輝いていた』(全三巻、朝日文庫)や『失われた九州王朝』をお願いします。

FMラジオ 箕面道ばたサミット 二〇〇〇年十二月二十日

天皇陵はなぜ造られたか

2004年 1月 1日 第1刷発行

著者 古田武彦
編集 FMみのお
発行人 横田幸男
東大阪市寺前町2-3-16
TEL & FAX 06-6727-0408
郵便番号 577-0845

※本書の本文書体は、ヒラギノ明朝体を使用しております。